

## メッセージアウトライン

### ヤコブの手紙 2:14~18「信仰と行い」

[14]「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役にたちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか」

ここでは「だれかに信仰があっても」と書かれていないことに注意。ここでは、だれかが自分には信仰があると自分自身で言っているだけの状態なのである。そのように口で言うことは簡単であるが、問題はそれは「どんな信仰か」であり、それは果たして信仰と呼ぶに値するものかということである。ヤコブはだれかが「自分には信仰がある」と主張してみても、その人に行いがないなら何の役にたちましょうと言う。主イエスもマタイ 7:21 で「私に向かって『主よ、主よ』という者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」と言われている。ヤコブはさらにそのような口先だけの信仰が、その人を救うことができるでしょうかと言っている。彼はここではっきりと、信仰というものには行いがともなうと言っているのである。

[15-17]「もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、『安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい』と言っても、もしからだに必要なものを与えないなら、何の役に立つでしょう。それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは死んだものです」

着る物がなく、食べる物がなくから困っているのに、安心して、暖かになりなさい、十分に食べなさいと言っても本人たちにはできるはずがない。これでは返って反感を買う結果となるであろう。信仰もそれと同じで、口先で自分は信仰があると言っても、もし行いがないなら、それだけでは死んだものであるとヤコブは言う。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、ヤコブは人が救われるのは信仰か行いかという問題を扱っているのではないということである。ある人は言う。「パウロは人はイエス・キリストを信じる信仰によってのみ義とされると言っているのに、ヤコブはさらに行いもなければだめだと言う。これは矛盾している」と。しかし、パウロとヤコブはクリスチャン生活のそれぞれ違った時期のことを取り扱っているのである。パウロはクリスチャンでない人がクリスチャンになる段階のことを言っているのである。→ローマ 3:28、ガラテヤ 2:16 これに対してヤコブはその時期よりもずっと後のことを言っている。彼は未信者に対して語っているのではなく、すでに信仰告白をしているクリスチャンを取り扱っているのである。行いによって救われるのではないということはヤコブは百も承知している。しかし、イエス・キリストを信じる信仰をもって救われた者は当然そこから、その信仰にふさわしい行動が出てくるはずだと彼は言っているのである。

そこに行いが出てくる。困っている人がいたら助ける。悲しんでいる人がいたら慰める。喜ぶ者とともに喜び、悲しむ者とともに泣く。そのように良い行い

を私たちがこの世に示していくことによって、この世は私たちがイエス・キリストの弟子であることを知り、確かに神が生きて働いておられることを知るのである。

[18]「さらに、こう言う人もあるでしょう。『あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます』

「こう言う人」とはヤコブの考えに賛同する人か、またはヤコブ自身のことを言っているのであろう。

この箇所は、あくまでもヤコブの言うことに反対して、行いなどなくても自分は信仰があるからそれだけでよいと主張する人に対して語られているところである。

りんごの木が生きていればりんごの実を結ぶはずである。同じように生きた信仰があれば行いという実を結ぶはずなのである。ヤコブはこのことをはっきりと指摘する。

私たちもイエス・キリストを信じる生きた信仰を持つ者として、その信仰にふさわしい行いをもって主に従い、この世に主の愛と恵みを伝えていく者となることが大切である。

→マタイ 25:31~46